地質学雑誌　第113巻　第1号（通巻1336号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成19年1月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 *News*

Vol.10 No.1 January 2007

国際惑星地球年とは
2007-2009

planetearth®
Earth Sciences for Society
2007 - 2009

国際惑星地球年は，地球の過去・現在・未来を研究する科学者達の国際組織である国際地質科学連合（IUGS）とユネスコとが共同でとりくむ国際的プログラムです。2005年の第60回国連総会は2008年を国際惑星地球年としました。国連に参加する181もの国や地域が，そして地球上に住む人々が，地球と人類の持続可能な未来のためには地球科学の知識と技術が欠かせないことを広く知り，それを積極的に活用するためにです。

2004年の津波のような自然災害は地球の持っている信じられない力を私たちに見せつけます。しかし，私たちは地球科学の知識を効果的に用いることで，命を救い，財産を守ることができます。その知識はまた，世界の人口増加による地球資源の需要拡大を持続可能な方法でまかなうことができるのです。

国際惑星地球年は「社会のための地球科学」を標語として，国連による国際惑星地球年2008を中心とする2007年から2009の3ヶ年を惑星地球の3ヶ年として，様々な活動に取り組みます。そのために，国際地質科学連合とユネスコを中心に，12もの国際的団体の協力により非営利法人「国際惑星地球年」（略称IYPE法人）が設立されました。

国際惑星地球年活動の大きな柱はアウトリーチプログラムとサイエンスプログラです。 地球科学が，どのようにして社会的課題の解決を可能とするか，また人々がどのようにしてそれをよく知り，親しむことができるか，解決の可能性・潜在性と認知の波及性にむけて取り組むプログラムです。プログラムが真に社会の力になるためには，国連に結集した国や地域が， それぞれのレベルでプログラムに取り組む必要があります。そのために，多くの国々で国内委員会が組織されつつあります。

いよいよ始まります！！

国際惑星地球年(IYPE)日本委員会推進事務局
〒305-8567 つくば市東1-1-1 中央第7
(独)産業技術総合研究所
地質調査総合センター内
http://www.gsj.jp/iype/index.html

日本地質学会*News*

Vol.10 No.1 January 2007

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル ６Ｆ
編集委員長　大友幸子
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

planetearth®
Earth Sciences for Society
2007 – 2009

Contents

年頭挨拶：大転換の年に新たな学会の発展を
（木村　学） ……2

案内 ……3
第21回太平洋学術会議：21st Pacific Science Congress/ Eurasian Geological Seminor 2007 -Geodynamic Process of Asia:Its Origin, Crustal Evolution, and Natural Resources Potential-/スプリング・サイエンスキャンプ2007参加者募集/日本地球惑星科学連合2007年大会

公募 ……3
東京工業大学地球惑星科学専攻教員公募

CALENDAR ……4

紹介 ……5
地質与地球化学研究進展　陳　駿　主編（諏訪兼位）/昼は雲の柱 石黒 耀　著（新妻信明）

2007年会費払込について ……6

学協会・研究会報告 ……7
「魅力ある大学院教育」イニシアティブ，アルゼンチン-チリ構造地質学フィールドコース（9/25-10/5/2006）報告（竹下　徹ほか）

専門部会だより ……9
構造地質部会2006年度例会　プログラムのお知らせ

支部コーナー ……10
中部支部　2007年中部支部年会のお知らせ/東北支部　支部総会・例会のお知らせ/関東支部　支部研究発表会のご案内

院生コーナー ……11
バイオミネラリゼーションワークショップ参加報告（向井広樹）

2007年度（2007.4～2008.3）院生割引会費申請受付中 ……12

追悼 ……13
大矢　暁会員のご逝去を悼む（小玉喜三郎）

学会記事 ……14
2006年度第６回理事会議事録

日本地質学会会員2006年版名簿の作成について ……16

会員の個人認証（ID・パスワード）のお知らせ

会員の個人認証システムを整備いたしました．学会HP上での会員向けの情報提供に対して必要となるID・パスワードは以下の通りです．

ID：会員番号（雑誌送付時の封筒に記載されている７ケタの数字）
パスワード：氏名のアルファベット頭文字（小文字）＋会員番号

例）会員NO 1234567の地質太郎（Chishitsu Taro）さんの場合
ID：1234567，パスワード：ct1234567
（注）氏名頭文字の「ふ」→「F」，「ち」→「C」と登録しています．

このIDとパスワードは個人固有のものです．他人に教えたり，流用したりしないで下さい．現在学会HP上では，「**会員のページ**」，「**Island Arc誌の無料閲覧**」**のアクセスの際に，このIDとパスワードが必要となっています．**

今年11月以降に入会された方は，登録が完了していませんので次の共通コードを利用して下さい．
ID：geosociety，パスワード：gsj.

ご不明な点は，学会事務局<main@geosociety.jp>までお問い合わせ下さい．

（日本地質学会オンライン化委員会）

第114年学術大会（2007年札幌大会）トピックセッション，シンポジウム募集中

2007年９月９日（日）～11日（火）に北海道大学で開催予定の第114年学術大会のトピックセッション（10件程度）とシンポジウム（８件程度）の募集を行います．それぞれの企画に応募する方は，**３月19日（月）までに**，日本地質学会行事委員会宛（main@geosociety.jp）にお申し込みください．詳細は，ニュース誌12月号またはホームページをご覧ください．

（日本地質学会行事委員会）

広告一部取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

年頭挨拶　**大転換の年に新たな学会の発展を**

日本地質学会会長　木村学

会員の皆様，2007年，あけましておめでとうございます．

2007年という年は様々な意味で大きな転換の年です．

まず日本社会を見ると戦後生まれの“団塊世代”が大量に定年を迎え，労働力人口の減少と少子高齢化がいよいよ急速に進行します．一方で，世界に目を転ずると日本や先進国の現状とは反対に大規模な人口爆発とそれにともなう資源・エネルギー・食料・水問題がいよいよ深刻となり，それを根源とする地球温暖化・地球環境問題が益々深刻となっています．このような地球規模の未来不安に対し，冷静に対応するために科学の目が問われています．

そのような中で国連によって設定された国際惑星地球年（2007～2009）は極めて時宜にかなったものであり，強力に推進しなければなりません．昨年末に公開された地球の未来への警告「不都合の真実」という映画は，その主役がアメリカ前副大統領ゴアであるとはいえ「これは共和党だ民主党だという政治の問題ではない．道徳の問題だ」の呼びかけの下，昨秋アメリカ地球物理学連合でも数千人の聴衆を集めました．地球科学が総力を挙げ，科学の目を持っての未来予測をすることが期待されているのです．人類は無知から生ずる恐怖を，唯一科学の発展によって克服してきました．いま人類の未来を背負い，地球科学がそれに答えることが求められているのです．

振り返ってGeologyは，地球を科学する学問として，18世紀後半にその名称を獲得して以来，宗教的地球観から次々と人類を解放してきました．Geologyが名称を確立してから一世紀後の19世紀後半，明治８年（1875），ドイツから若干20歳のナウマンがやって来て，この日本にGeologyがもたらされました．北海道には明治６年（1973），アメリカ南北戦争を終えたばかりのアメリカから38歳のライマンがやってきて初めての地質図をつくりました．

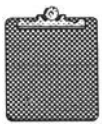
そして，それから更に一世紀の後の20世紀後半，ついに人類はプレートテクトニクスによって，新しい地球観を獲得しました．それから更に半世紀弱後の今や，時々刻々の観測によってそれが実証されたのみならず，地球内部の変動と地球環境のリンク，そしてそこにおける人間活動の影響までをも科学の対象として深く切り込み，解明をすすめる科学へと発展しております．20世紀前半までに分離・細分化した地球の科学は，総合化によって地球の謎，地球の未来を研究する発展段階にあります．

様々に分立していた地球科学関連の学会は，社会からの要請，科学自身の発展の必然性から，近年，国際的にも多くが総合化の方向へ進みました．アメリカの地球物理学連合は15年前の会員数２万人から５万人を抱え，世界最大の学会として益々発展しております．内容的にも地球環境に関わる科学を重点的に包含する路線を進めております．５年前に発足した欧州地球科学連合（EGU）は着実に発展しております．アジア地域でも連合体ではありませんがアジアオセアニア地球科学会（AOGS）は，発足後３年目の今年，タイで開催，2008年は韓国の開催を予定しており，アジア地域で着実に実績を積んでおります．日本でも長年開催されてきた地球惑星関連学会合同大会は昨年から新しい組織体・地球惑星学会連合大会（JPGU）として開催されております．連合大会の参加者は８千人におよび，総合化された学術大会としては世界第３位の規模であります．科学の発展を行政の中に着実に反映させるための日本学術会議の体制も昨年から大きく変わり，これも全ての地球科学の総合化を強く促しております．このような歴史的な大転換が，人類６回目の情報革命と言われる中で急速に進行しています．

地球を研究するGeology独自の古き良き伝統を着実に継承すると共に，このような新しい流れを推進する“新しいGeology”へと一層の衣替えを進め，この太平洋に浮かぶ小さな島から地球の未来へのメッセージを発しようではありませんか．さらに災害列島日本社会へも科学のメッセージを届けようではありませんか．日本地質学会は，この激動する内外の変化へ機敏に対応できる新しい学会の構築をめざし，会員の皆様とともに，学術推進事業の一層の発展，着実な社会貢献事業の推進，そして後継者育成を強く意識した，きめ細かい教育普及事業の展開を３つの柱として様々な抜本的改革をすすめております．それがこの学会が発展し，社会へ大きく貢献し，人類の未来を切り開く道であります．

今年も会員の皆様の引き続くご協力をお願いするとともに，一層の学会の発展と皆様のご活躍を祈念し，念頭のあいさつといたします．

（http://web.mac.com/tectonicsgaku）



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

第21回太平洋学術会議：21st Pacific Science Congress

日程：平成19年６月12日（火）～18日（月）

メインテーマ：**「太平洋域における自然と社会の多様性」**

太平洋学術協会（PSA）は，太平洋地域の学問研究の発展を通して太平洋地域の諸国民の絆の強化を目的とする国際学術団体で，1920年にハワイで設立されました．日本からは、日本（代表機関：日本学術会議）と沖縄（代表機関：琉球大学）が会員として加盟しており，現在「第21回太平洋学術会議」開催に向けて，日本学術会議と国内13学術団体及び沖縄県内８大学が協力して運営・準備を進めています．

この太平洋学術会議は，極めて多くの学問分野を包括し，かつ現代にマッチした学際的分野までカバーする総合的な会議ですので，多くの研究者・学生・一般市民の皆様のご参加をお願いいたします．

公開シンポジウム開催！高校生＆市民参加型プログラム

同時通訳付き　参加費無料

世界的に著名な研究者をお招きして公開シンポジウムを開催します．同時通訳付き，参加費無料ですので，高校生，教員，一般の方どなたでも参加できます．

論文投稿，参加申込み受付中

県内大学等の研究者，学生の参加をお待ちしています．詳細はホームページをご覧ください．

問い合わせ

第21回太平洋学術会議事務局

（琉球大学学術国際部国際企画課内）

TEL　098-895-8032

FAX　098-895-8037

www.psc21.net

E-mail：psc21@to.jim.u-ryukyu.ac.jp

Eurasian Geological Seminor 2007-Geodynamic Process of Asia : Its Origin, Crustal Evolution, and Natural Resources Potential-

(International Joint Meeting by RCSP of Mongolian University of Science and Technology, Geological Information Center of Mongolia, The Nagoya University Museum, and IGCP 516)

日程：2007年６月18日～28日

6/18：Meeting at Ulaanbaatar

6/19-21：Pre-symposium Field Excursionin in Gobi Desert;fossil dinosour and its eggs.

6/22-23： Scientific session

6/24-25：Post-symposium Field Excursion 1 in the Ulaanbaatar area; the Devonian accretionary complex of the Khangai-Khentei belt -evidence of the Mongol-Okhotuk Ocean-

6/24-25：Post-symposium Field Excursion 2 in the Ulaanbaatar area; Zaamar gold mining area.

6/26-28：Post-symposium Field Excursion 3 in the Oyu-Torgoi area; one of the largest copper-gold mine in the world.

場所：Mongolian University of Sciences and Technology, Ulaanbaatar, MONGOLIA

問い合わせ先：

Sersmaa Gonchigdorj

E-mail;sers_gon@yahoo.com,

sers@must.edu.mn

Fax: +976-11-312291

Kazuhiro Tsukada

E-mail;tsukada@num.nagoya-u.ac.jp

Fax: +81-52-7895896

「スプリング・サイエンスキャンプ2007」参加者募集

高校生のための２泊３日の先進的科学技術体験合宿プログラム

●開催日：**2007年３月21日（水・祝）～29日（木）の期間中の２泊３日**

●応募資格：応募締切日時点で，高等学校，中等教育学校後期課程または高等専門学校（１～３学年）等に在籍する生徒．

●参加費：10,000円（自宅から会場までの交通費には自己負担．宿舎や食事は用意します）

●選考方法及び選考結果の通知：参加申込書にもとづき，各プログラム会場等が参加者を決定します．選考結果は2007年２月下旬に発送いたします．

●定員：受け入れ会場ごとに８～30名（合計308名）

●申し込み方法：参加申込書をダウンロードし，必要事項を記入の上サイエンスキャンプ事務局までお送り下さい．募集要項の冊子をご希望の方は公式サイトからでお申し込みいただくか，サイエンスキャンプ事務局までお問い合わせ下さい．

●応募締切：**2007年２月13日（火）必着**

●お問い合わせ先：

財団法人　日本科学技術振興財団

振興事業部（実施運営機関）

担当　四村・今瀬・武井・宮坂

〒102-0091東京都千代田区北の丸公園2-1

電話　03-3212-2454　FAX03-3212-0014

e-mail: camp@jsf.or.jp

公式サイト：http://ppd.jsf.or.jp/camp/

日本地球惑星科学連合2007年大会

日程：2007年５月19日（土）～24日（木）

会場：千葉幕張メッセ国際会議場

大会HP：http://www.jpgu.org/meeting/

（連合HP：http://www.jpgu.org/）

★予稿集原稿投稿・参加登録開始：

2007年１月10日（火）～

★早期投稿締切：

2007年２月７日（水）17：00

最終投稿締切：

2007年２月14日（水）12：00

★事前参加登録締切：

2007年４月13日（金）12：00

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

東京工業大学地球惑星科学専攻教員公募

１．募集人員

地球惑星科学専攻　助教授　１名

専門分野：地球惑星科学（地球惑星内部物理学，宇宙地球化学など）自らの専門分野のほか，本専攻の他分野にも広く関心をもち，積極的に共同研究を展開できる活動的人材を強く望みます．

２．応募資格：博士の学位を有する者

3．着任時期：採用決定後，できるだけ早い時期を希望します．

4．提出書類
(1) 履歴書（市販のもので可）
(2) これまでの研究・教育の実績（2,000字程度）
(3) 研究業績リスト
　A．査読付き原著論文/ B．プロシーディングス，総説など/ C．著書，その他特記すべき出版物/（いずれも和文のものは和文で表記すること）
(4) 主な原著論文の別刷（コピー可）　3篇以内
(5) 今後の研究・教育の計画・抱負（2,000字程度）
(6) 応募者について参考意見をうかがえる方（2名）の氏名および連絡先（所属，住所，E-mail）

5．応募締切：**2007年2月28日（水）必着**
封筒の表に「助教授公募書類」と朱書して，できるだけ宅配便で送付してください．

6．提出書類の送付先及び問い合わせ先
〒152-8551　東京都目黒区大岡山2-12-
東京工業大学大学院理工学研究科
地球惑星科学専攻　高橋　栄一
E-mail：etakahas@geo.titech.ac.jp
Tel: 03-5734-2338

詳細ホームページ：
http://www.geo.titech.ac.jp/koubo/koubo.html

CALENDAR

2007.2～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

2007年

2月　February

○日本古生物学会第156回例会
2月2日（金）～2月4日（日）
会場：徳島県立博物館
http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp./palaeont/

☆西日本支部2006年度総会および第153回例会
2月10日（土）
会場：山口大学大学会館（吉田キャンパス）
http://geosociety.jp/branch/west/index.ht

○第98回　深田研談話会
2月23日（金）15-17時
テーマ：「マグマの動きをとらえる－富士山，三宅島，小笠原硫黄島」
講 師：鵜川元雄 氏（防災科学技術研究所）
場 所：深田地質研究所研修ホール
参加費：無料

3月　March

○第41回日本水環境学会年会
3月15日（木）～17日（土）
場所：大阪産業大学
http://www.jswe.or.jp/index.html

☆東北支部総会・例会
3月17日（土）～18日（日）
会場：秋田大学（秋田市手形学園町）
講演申込締切：2月15日（木）
問い合わせ先：秋田大学環境資源学研究センター
高島：takasima@ipc.akita-u.ac.jp,
村上：hidekim@cges.akita-u.ac.jp

☆日本地質学会構造地質部会春の例会
3月16日（金）～18日（日）
場所：和歌山県白浜町　ホテルベイリリー
参加申込・講演題目締切：2006年12月20日
講演要旨締切：2007年2月10日
http://www.geosociety.jp/organization/bukai/struct/struct-index.html

○Second International Conference on the Geology of the Tethys
3月19日（月）～23日（金）
場所：Cairo University
Fax: 002-02-5728843
Tel.: 002-02-5676887，002-012 2926034
E-mail：elsayedyoussef2005@yahoo.com, elsayedyoussef@hotmail.com
http://geosociety.jp/calendar/2007-2nd-Tethys.pdf

○日本地理学会2007年春季学術大会
3月20日（火）～22日（木）
（ただし総会・代議員会は19日）
場所：東洋大学
問い合わせ先：渡辺満久（東洋大学）
電話　03-3945-8288
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajg/home_J.html

○日本堆積学会2007年つくば例会
3月27日（火）～31日（土）
会場　つくばカピオ（茨城県つくば市）
http://sediment.jp/

5月　May

○日本地球惑星科学連合2007年大会
5月19日（土）～24日（木）
会場：幕張メッセ国際会議場
http://www.jpgu.org/

○日本地下水学会2007年春季講演会
5月26日（土）
会場：千葉大学松戸キャンパス
http://www.groundwater.jp/jagh/

6月　June

○Eurasian Geological Seminor 2007-Geodynamic Process of Asia:Its Origin, Crustal Evolution, and Natural Resources Potential-
6月18日（月）～28日（木）
場所：Mongolian University of Sciences and Technology, Ulaanbaatar, MONGOLIA
問い合わせ先：
Kazuhiro Tsukada
E-mail;tsukada@num.nagoya-u.ac.jp
Fax: +81-52-7895896

○GEOINFORUM-2007第18回日本情報地質学会総会・講演会
6月21日（木）～22日（金）
会場　島根県民会館
http://www.jsgi.org/

9月　September

☆第114年日本地質学会学術大会
9月9日（日）～11日（火）
会場　北海道大学（札幌市）

10月　October

○第3回国際シンポジウム“東および南アジアの地質学的解剖”（IGCP516）
10月8日（月）～14日（日）
場所：インド・デリー大学
http://staff.aist.go.jp/hara-hide/igcp516

11月　November

○第4回“Gondwana to Asia”国際シンポジウム・国際ゴンドワナ研究連合2006年学術大会
11月8日（木）～10日（土）
会場：九州大学・西新プラザ
問い合わせ先：gond-asia@scs.kyushu-u.ac.jp：中野伸彦（九州大学）
http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/2007gond-asia/

紹　介

地質与地球化学研究進展

陳　駿　主編

（南京大学出版社，2006年11月出版，B５版，580頁，定価180元）

本書は，南京大学　王　徳滋教授（Prof. Wang Dezi）の地質科学研究60周年と王教授の生誕80年を慶賀した記念号である．本書を英文で表記すれば，”Research Progress on Geology and Geochemistry”となる．

王教授は1927年６月27日に誕生した．1946年に南京大学に入学して地質科学を専攻し，1950年７月に南京大学を卒業した．卒業後直ちに南京大学地質科学教室のスタッフに選ばれ，研究と教育に専念することとなった．王教授は火成岩岩石学者である．華南地方の火山性花崗岩，S型花崗岩，A型花崗岩など，花崗岩の研究に没頭し，多くの注目すべき研究成果を挙げてきた．1978年に南京大学教授に昇進し，1984年から４年間南京大学副学長をつとめた．この間，中国地質学会の副理事長もつとめている．1997年中国科学院院士に推挙された．我が国の学士院会員に相当する．南京大学では，院士は現役教授として，生涯，研究に専心できる．なお王教授は岩石学研究だけではなく，地学教育にも深い関心を抱いている．

本書の冒頭には，王教授の学生時代から現在までの60年間の約50枚のカラー写真がおさめられている．次に王教授の業績をたたえる２篇がおさめられている．

本書の主体は５つの章にわかれており，王教授自身および教授の友人・学生達による48論文が寄せられている．

第１章「岩石学と岩石圏動力学」には16論文がおさめられる．16論文のうち12論文は花崗岩研究であり，主として華南地方の花崗岩を対象にしているが，遼東半島やチベット高原の花崗岩を対象としたものもある．また，華南地方の花崗岩とアメリカ西部の花崗岩とを比較検討したものもある．論文の多くで，U-Pb年代，Nd年代，Rb-Sr年代が明示され，稀土類元素や微量元素の挙動を基にした花崗岩成因論が展開されている．他の４論文は，チベット高原･四川省のマントル源火成岩，華南地方の火成作用におけるマントル・地殻交互作用，華南地方の玄武岩，華南地方の火山岩を取りあつかっている．

第２章「鉱物学・鉱床学・地球化学」には14論文がおさめられる．14論文のうち７論文は，花崗岩に胚胎する鉱床や花崗岩マグマ関連の鉱化作用の研究で，ジルコン中の流体包有物を取りあつかったものもある．14論文のうち２論文は，超高圧変成作用とエクロジャイトの研究で，エクロジャイトを構成するザクロ石・単斜輝石中の流体包有物を取りあつかったものもある．他の５論文は金鉱床と変成作用，ウラン鉱床，石油鉱床，微生物，プレートテクトニクスにもとづいた探鉱法を取りあつかっている．

第３章「先カンブリア時代・構造地質・古生物」には７論文がおさめられる．７論文のうち３論文は構造地質学研究であり，天山山脈の構造地質，断層運動指示者としての石英粒，圧砕作用を対象にしている．他の４論文は先カンブリア時代の大陸地殻の地質構造，地震観測，中生代花粉化石，玄武岩を取りあつかっている．

第４章「資源・環境」には８論文がおさめられる．８論文のうち２論文は，南京などの都市の環境地質である．他の６論文は，東北地方（旧満州）の中・新生代火山岩と断層，地下水，メタンハイドレート，天然ガス，三峡ダムの災害防止，土壌の地球化学を取りあつかっている．

第５章「地学教育」には３論文がおさめられる．地質科学における人材確保，地質科学の新人養成，地球科学・数学博物館の提唱などが熱心に論じられている．

次に**「回顧録」**として12篇の原稿が寄せられている．王教授自身の回顧談や王教授夫人の回顧談も集録されていて，興味深い．

最後に**「王教授の業績」**が表示されている．すなわち13冊の著・訳書と207にのぼる論文（1957～2006）の詳細が表示され，蟹沢聰史・黒田隆之助・諏訪兼位らとの共同研究も明示されている．

本書には，王教授の専門の花崗岩に関する研究論文だけでなく，多岐にわたる研究論文が集録されている．これらはすべてup to dateな原著論文である．残念なことは，すべて中国語で書かれていることである．せめて論文名，著者名，内容要約は英文で示してほしかった．ともあれこの記念号は，現在の中国の地質科学研究者の関心と動向を知るうえで重要である．関心のある方々のご一読をおすすめしたい．

本書を直接購入する場合は，中国　210093 南京市　南京大学出版会宛に手紙を出し，送料を確認のうえ，適切な通貨で送金するとよい．送料を含めて3,500～4,000円程度で購入できると思われる．

（諏訪兼位）

昼は雲の柱

石黒　耀　著

（講談社，2006年11月発行，A４版，496頁，2000円（税別）．ISBN　978-4062137058）

本書は，日本地質学会表彰を受賞している石黒 耀氏による地質災害小説の第３作目である．加久藤火山噴火を題材にした第１作「死都日本」，および東海地震を題材にした第２作「震災列島」の著作に続いて，第３作で取り扱っているのは富士山の噴火である．2004年に完成した富士山ハザードマップで取り上げられている殆どの噴火が，ストーリーのなかに登場する．臨場感の溢れる描写と解説は富士山で起こり得るあらゆる噴火を知るために役立つ．前２作と同様，著者は専門書を読みこなし，記述内容については専門家の監修を受けているので，地質学的な誤りを発見することは出来なかった．ただ一箇所，343頁の「河岸段丘上」とすべきところを「河岸段丘状」としている漢字変換ミスを見つけた程度である．

「震災列島」では，東海地震の襲来と並行してヤクザとの抗争を描いていたのに対して，「昼は雲の柱」では，旧約聖書と日本神話の関係，日本神話と富士山の関係について，地元高校生カップルが謎解きをしてゆく姿が描かれている．日本神話がつくられた時期は，中国の秦の始皇帝の頃とのことで，西洋と通商関係のあった中国を経て西洋の神話が日本に伝わって来ていたという設定のもとに話を展開している．神話に関して素人の評者にとってその内容については何も言及できないが，日本神話が阿蘇山周辺を舞台にしたものであるとの詳細な説明がなされていて興味深

い．著者は，宮崎大学在学中に生物関係のクラブに入って九州の火山を見て回り，地質と生物の間の密接な関係を知って地質に興味を持たれたとの経歴から類推すると，同じクラブのメンバーであった奥様と共に大学生の頃から暖めてこられた内容であろう．

書名の「昼は雲の柱」は旧約聖書の「昼は雲の柱をもって彼らを導き，夜は火の柱をもって彼らを照らし」から付けられたものであるが，書名から富士山の噴火が詳細に記述されていることを知るのは難しい．ただ，表紙の帯に著者の紹介とともに富士山噴火についてのクライシスノベルと謳っているので，かろうじてその内容を知ることができる．この帯には「死都日本」と「震災列島」の写真とともに，両書が日本地質学会表彰を受賞したことも記されており，日本地質学会がこのような文筆活動に対して関心を持って対応していることを一般読者に知らしめている．

本書のクライマックスで起こる富士山の噴火は，ハザードマップの想定を越す最も激しいものであるが，避難計画が2006年２月に中央防災会議が定めた火山防災ガイドラインに沿って発動し，各方面の協力によって最小限の被害に防がれるとの粗筋である．この異常な噴火を女主人公の父親である富士山地質研究者が，一握りの岩片から推察する．如何なる地質学調査も現場における適切な調査と試料の採取が最も重要であることを著者は丁寧に記述している．このような本質的な現地調査と試料採取には，この岩片が特異なものであるとの認識を現場で持つ必要がある．富士山についての入念な調査の経験を無くして何が正常で何が異常であるかは判断できない．地道にそのような調査を積み重ねてきた研究者が，地質災害の際に最も頼りになる存在であることを筋書きの重要な柱に据え，地質学者に対する期待と感謝そして励ましを送っている．地道な調査に裏打ちされた富士山噴火のシミュレーションが威力を発揮し，懐疑的であった気象庁や政府・県庁の対応を変えて行く様子が描かれている．

本書は専門的解説で退屈になりがちな内容であるが，開発と自然保全，行政の権威と地道な調査研究に基づく予測，行政の責任逃れと住民の安全，真実の報道と販売部数獲得のための記事，高校のクラスにおけるイジメへの対応，緊急時における決断，など我々の周りにある多くの矛盾や葛藤を盛り込み，読者の目を引き付けている．

富士山のハザードマップの副読本とも言える本書は，富士山の噴火様式と住民の対応が高校生にも分かるように記述されており，富士山の噴火様式とその地質災害へのイメージトレーニングのためにも，是非一読をお勧めしたい作品である．

（新妻信明）

写真：2005年日本地質学会（京都大会）の日本地質学会表彰授賞式後の懇親会での石黒耀ご夫妻．

2007年の会費払込について

会則により，次年度分の会費を前納下さいますようお願いいたします．会費年度は2005年より４月～翌年３月までに変更されておりますが，会費請求時期につきましては，これまで通り，12月とさせていただいておりますので，ご協力をお願いいたします．2007年４月～2008年３月の会費額は下記の通りです．

基本的な請求額は下記（①）の金額です．アイランドアークを購読されている方は②の金額を加算します．

会員資格	①2007年４月～2008年３月分会費	②アイランドアーク購読料（購読者のみ請求）
正会員	12,000円	8,000円
〃　院生割引　※	8,000円	6,000円
準会員（学部学生）	5,000円	6,000円

※注：大学院に在籍し，定収のない方で所定の申請をされた方のみに適用します．まだ申請されていない方は早急に手続きして下さい．なお，**2006年度分までの会費についての申請は終了しておりますので，2007年度分会費にのみ適用となります．**

１．自動引き落としを登録されている方の引き落とし日は12月25日（月）でした．

2007年度分会費の引き落とし日は12月25日でした．請求書ならびに引き落とし通知の発行は省略させていただきますのでご了承下さい．引き落とし額は基本的には2007年度分会費およびアイランドアーク購読料（印刷物受取の場合）です．これより以前に不足額がある場合には加算され，余剰金（繰越）がある場合はその分を減額して引き落としとなっています．通帳には金額とともに「チシツカイヒ」あるいは「フリカエ」，「SMBC」などと表示されますので必ずご確認下さい．

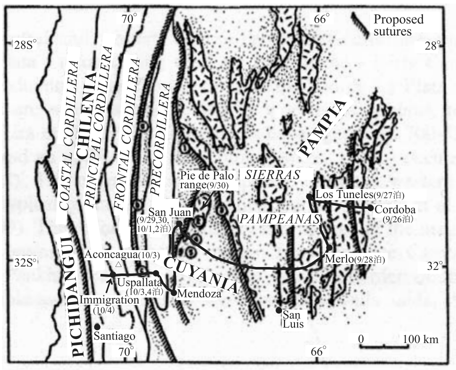
２．上記以外の方（お振り込み）

12月中旬頃までに請求書兼郵便振替用紙をお送りいたしました．折り返しご送金くださいますようお願いいたします．

３．自動引き落としをご利用下さい．

請求書に同封の書式にてぜひ自動引き落とし申込をお願いいたします（お申込数によっては2007年２月または３月にも引き落とし手続きを致します）．徐々にご利用は増えていますが，学会としては自動引き落としによる払込をより多くの会員に積極的に採用していただきたく，ご理解とご協力をお願いいたします．自動引き落としを希望する方は，「自動払込利用申込書」（10月号巻末掲載）をお送り下さい．

（日本地質学会会計委員会）



第１図．フィールドコース位置図．テレーンおよび山系（cordillera）名を太字および細字・イタリックでそれぞれ示す．日付入りのルートを曲線で示す．ハッチ部は主としてデボン紀以前の基盤岩，打点部は第四系を示す．Ramos (1988)を改変．

学協会・研究会報告

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ，アルゼンチン－チリ構造地質学フィールドコース（9/25-10/5/2006）報告

竹下　徹（北海道大学）・**受講大学院生一同**（下記）

北海道大学大学院理学研究科物理学・地球惑星科学・数学専攻では，平成17年度に「全国大学院共通滞在型教育プログラム」というタイトルの「魅力ある大学院教育」イニシアティブが採択され，すでに複数のコースが実施された．本イニシアティブの目指す所は，これまで主として各大学の研究室単位で教育されていた全国の大学の大学院生を一定期間ある場所に滞在させ，世界トップレベルの講師からセミナー（地球惑星科学専攻の場合はフィールドコース）形式で学ぶことにより，スクールの壁を越えて一流の研究者を育てていこうとする所にある．このフィールドコースの一つを今回私とCees Passchier（Mainz大学）が担当し，昨年9/25-10/5の間アルゼンチンおよびチリで実施したので概略を報告する．

（1）参加者（合計11名，役割を括弧内に記す）：

ドイツから＞
Mainz大学教授　Cees Passchier博士（講師）
Mainz大学博士課程３年　Sara Coelho（講師助手および会計担当）
アルゼンチンから＞
Cordoba大学教授　Roberto Martino博士（フィールド案内，２日間のみ参加）
Buenos Aires大学博士課程２年　Victor Garcia（フィールド案内）
Buenos Aires大学博士課程２年　Daniel Yagupsky（フィールド案内）
Buenos Aires大学学部６年（日本の修士２年相当）Carmen Martinez Dopico（フィールド案内）
日本から＞
北海道大学教授　竹下　徹博士（講師）
北海道大学博士課程２年　今山武志（受講生）
静岡大学博士課程１年　針金由美子（受講生）
九州大学博士課程１年　有馬和宏（受講生）
京都大学修士課程２年　上田匡将（受講生）

（2）日程と見学地点地質概要

本文中の地名，山系（cordillera）およびテレーン名を第１図に示す．山系とテレーン区分は一致していないことに注意．

9/24　成田発．

9/25　ブエノスアイレス（Buenos Aires）着，夕刻ブエノスアイレス大学において，Victor GarciaおよびDaniel Yagupskyよりアンデスの地質とテクトニクスについて講義を受ける．

9/26　飛行機でコルドバ（Cordoba）に移動．

9/27　東Pampiaテレーンで，カンブリア紀のミグマタイト質片麻岩とデボン紀の花崗岩を観察．

9/28　東Pampiaテレーン中のオルドビス紀－デボン紀Tres Arboles剪断帯（Los TunelesとMerloセクション）と中新世以降の断層の観察．

9/29　車でサンファン（San Juan）に移動．途中，東Pampiaテレーン西部のオルドビス紀変堆積岩を観察．

9/30　原生代中期のPie de Palo complexのオフィオライト（カンラン岩～変はんれい岩）がカンブリア紀の変堆積岩（主として泥質石灰岩）に衝上する大露頭を遠望．Pie de Palo山地はローラシア大陸の断片と推察され，オルドビスーシルル紀にゴンドワナ大陸に接合したと考えられている．カンブリア紀の変堆積岩中の構造解析とGPSを用いたマッピング．

10/1　サンファン　西方Precordillera東縁における，中新世堆積岩の第四紀れき層への衝上（活断層）と中新世堆積岩中の幅広い褶曲帯（表紙写真）の観察．

10/2　サンファン　西方Precordillera東縁の活断層露頭，地形および断層に沿う地下水移動の証拠（裏表紙写真）の観察．著しく褶曲したPrecordilleraのカンブリア紀－オルドビス紀石灰岩とデボン紀砂岩・泥岩の観察．Uspallataへ車で移動．

10/3　Frontal Cordilleraを構成するペルム紀－トリアス紀の安山岩－流紋岩質火山および火山砕屑岩類（Choiyoi層群）とペルム紀の花崗岩を観察．また，CuyaniaとChileniaのテレーン境界（衝上断層）を遠望．さらに，この境界に発達するトリアス紀のリフト堆積物を観察．最後に，Principal Cordilleraの石炭系，Choiyoi層群，ジュラ－白亜系および中新統が衝上断層で繰り返すアコンカグア褶曲衝上断層帯（thin skin tectonics）を観察．アメリカ最高峰アコンカグア山（6959m）を遠望（写真１）．

10/4　アルゼンチン－チリ国境チリ側のPrincipal Cordilleraを構成するジュラ紀－白亜紀，始新世－漸新世，さらに中新世の火山および火山砕屑岩類を観察．これらは，現在と同様の陸弧－海溝系で形成された火山弧由来の堆積物である．

10/5　メンドーサ（Mendoza）からブエノスアイレスに飛行機で移動．

10/6　ブエノスアイレス発．

10/8　成田着，解散．

（3）フィールドコースの良かった点・悪かった点および今後の課題

海外フィールドコースは我々にとって貴重な体験ではあったものの，反省点もいくつか残った．今後，海外でのフィールドコースを引率される教官や参加を希望する大学院生にとって，我々の正直な感想は多少とも参考になると考え，以下に引率者の竹下ほか，参加大学院生の感想を記す．なお，本フィールドコースについてはホームページ（http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~geotec/takeshita/Top-page.html）で紹介している．

竹下の感想：

今回の様な全面露頭の地域では，岩相や地層の厚さ，および面構造・線構造などの構造要素の空間変化を３次元的に観察することが出来る．しかし，その様な３次元地質調査を行うまでには至らず，殆ど案内者の露頭説明に終始してしまった所に少し悔いが残った．地質調査実習を主とするフィールドコースを，海外のフィールドで外国人研究者と協力してどう達成していくのかは今後の大きな課題である．

上記の反省点にもかかわらず，アルゼンチンの地質は我々に多くを教えてくれた．私自身は，本フィールドコースにおいて，以下の２つが最も印象的であった．一つは，大陸を構成する岩石である．大陸地域では，しばしば非活動的大陸縁で堆積したと考えられる厚い石灰岩や砂泥質堆積岩が広く分布するが，本地域の原生界から古生界も，主としてその様な地層で構成されていた．我々のテクトニクス観はどうしても活動的大陸縁で生じている過程のみに基づいてしまいがちだが，やはり非活動的大陸縁のテクトニクスにも同等の注意を払う必要があろう．

もう一つは，上田・金森（1978）が提唱したチリ型沈み込み境界（スラブの低角沈み込み）に伴う現象であった．このモデルは当然

知っていたが，実際に現地に行って見てその強烈さに驚いた．ナスカプレートの低角沈み込みは中新世以降開始されたが，海溝から800kmも離れた所まで南北走向の巨大衝上断層が発達する．衝上断層の一部に沿っては多数のシュードタキライトが観察され，地震断層として機能していたと推察された．また，中古生層基盤岩の衝上体の前縁には，中新世のforedeep堆積物（モラッセ堆積物）が不整合で厚く重なっている．さらに，中新統は第四紀層に衝上し，褶曲衝上断層帯を形成する．10/1に観察した衝上断層上盤側の幅広い中新統の褶曲帯（表紙写真）は，我々の想像をはるかに超える規模のものであった．翌10/2には第四紀層平坦面を切って形成された衝上断層露頭や地形を観察したが，ここに大量の地下水が噴出していたのには驚いた（裏表紙写真）．地下水からは石灰の沈殿が過去に間断なく継続され，現在比高20mにも達するトラバーチンの小丘が形成されている．

参加大学院生の感想：

北海道大学博士課程２年　**今山武志**

今回，古生代初期の剪断帯やテレーン境界付近で，ナスカプレートの低角沈み込みに伴い，第三紀に再活動した断層をいくつか観察した．Tres Arboles 剪断帯は主に古生代初期のマイロナイトやウルトラマイロナイトから構成されるが，第三紀の脆性的な断層も多く発達する．また，メンドーサ西域では，CuyaniaとChileniaテレーン境界付近に発達したトリアス紀リフト堆積物や中新世後期～鮮新世前期の衝上断層を眺望した．夕食時，Passchier教授に質問．「どれくらい再活動した断層（帯）を知っていますか？」．彼曰く，「インドやスリランカを始め，古生代初期や原生代の剪断帯の再活動は一般的であり，始生代の大陸地殻は概ね安定だ（但し今山意訳）」．さて，私の研究するヒマラヤ造山帯の剪断帯も複数の変形および変成作用を被っている．これらの剪断帯の変形，温度―圧力履歴および年代値の空間変化を把握する事は非常に重要であるが，今回の露頭は連続的に試料採取可能という点では百点満点だ．

全体の感想は，やはり「百聞は一見に如かず」ということ．実際に地質に触れ，アンデス造山帯に対する想像力が少なからず生まれた．第二に強調したいのは滞在型の意義である．今回出会えた海外の学生達との研究交流は非常に刺激的であり，特に大局的に地質を理解する視点に印象を受けた．その一方で，地球化学や年代測定に関しては日本人学生が彼らにフィードバックできる部分が少なからずあったと思う．最後に個人的反省点として，フィールドワークの経験不足を痛感した．

静岡大学博士課程１年　**針金由美子**

今回注目したのはマイロナイトとウルトラマイロナイトが観察されたTres Arboles剪断帯である．北西部のLos Tunelesセクションではマイロナイトとシュードタキライトの複合構造，南部のMerloセクションでは西に向かってマイロナイトからウルトラマイロナイトへ変化した構造が観察された．これらは地殻浅部から深部に発達した剪断帯であること，また，剪断帯深部は幅16km相当のウルトラマイロナイト帯で構成されることが報告されている（Whitmeyer & Simpson, 2003）．しかし，剪断帯の記載や観察がかなり曖昧であることや幅16kmのウルトラマイロナイト帯についていくつか疑問があった．露頭観察から，剪断帯が地殻浅部から深部に発達した剪断帯であるとは単純に言えないこと，幅16kmのウルトラマイロナイト帯を持たない事実があった．このような論文情報と露頭情報の差をはっきりと実感したのは初めてで，さらにアルゼンチンにおけるこうした構造のほとんどが未調査，または調査が滞っていることを知った．これらをふまえてアンデスの構造解釈に何らかの貢献をしたい，改めて調査したいと強く感じた二週間だった．

古生代，中生代，新生代と長い年月が作り出した地質構造の断片的な部分を自分の目と足で体感したことはとても良い経験であった．しかし，私自身がかなり狭い視野で地質構造を捉えてきたため，アンデスの地質構造を二週間で理解することが大変で，もっと広い視野をもって取り組まなければならないと反省した．これを教訓として，今後の研究活動に役立てていきたい．

九州大学博士課程１年　**有馬和宏**

アルゼンチン入りして３日目．コルドバの市街地からどんどん遠ざかる方向へとレンタカーで走って行った．２時間もすると起伏の緩やかな荒野が広がってきた．土ぼこりをたてながら車で丘の上へと向かった．最初に訪れたのはデボン紀の花崗岩だ．表面は多少風化して褐色がかった部分も見られたが，ハンマーで割ってみるとすぐに新鮮な断面が現れた．部分的に非常に粗粒になっており石英がかなり透明であった．白雲母も黒雲母も含み，すぐ側の露頭では雲母が日の光を反射してきらきらとしていた．今まで車で走って来たところも花崗岩だった．なだらかな地形のためどの方位を向いても丘から数十km先の山の麓まで見渡すことができた．足元の花崗岩から遠くへやった視線の先まで延々と花崗岩は露出していた．これだけ巨大な花崗岩を目の当たりにすると大陸を作っている岩石というのも実感できる．9/30に訪れたサンファン東ではテレーン境界となるスラストの鉛直断面が丸ごと露出しているのに感激した．2000m近くの高さがある山腹が側方へ20km以上に渡って続き，スラストを十数km先まで追うことができた．

今回ブエノスアイレス大学の自分と年齢の近い学生の方にも非常によく説明をして頂いた．年代，地域的広がり共に非常に広範囲な地質であったにも関わらずよく勉強されていた．今回のコースで行った場所でみっちりと数週間の地質調査の訓練も受けたそうだ．外国の学生が頑張っている姿を見るよい機会となった．我々はじっくりと腰を据えて観察する時間を十分に取れなかったものの，初めて見るものばかりのアルゼンチン・チリの地質を多く体験できたことは素晴らしかった．

写真１．アルゼンチン―チリ横断国道沿いよりアコンカグア山（6959 m）を望む．

京都大学修士課程２年　**上田匡将**

今回のフィールドコースは，盛り沢山のスケジュールでいささか消化不良気味の所があった．しかし，日本では見ることのできない広大な地質を次々と目の当たりにし，また国外の研究者・学生たちとともに行動する中で，「日本の地質学」からグローバルな科学としての地質学へと，視野が広がったように感じた．

自らの視点を客観化する手がかりのひとつになったのはもちろんその気候である．現地のあまりに乾燥した気候に触れて，日本に育った人間とアルゼンチンで生まれ育った人間では自然に対する感性が異なって当然だろうな，と素朴に感じた．

そして環境が理解に与える影響の大きさを，アンデス内の河岸段丘地形を見て実感した．現地では乾燥気候および人的な影響の少なさのためか，数ｍスケールから数十ｍスケールの段丘崖がほぼ垂直に切り立った崖として保存され，その非常にシャープな地形のため各段丘面を一枚ずつはっきりと数えられるのである．私は河岸段丘を，日本では侵食・植生・土地の活用などのせいでよく注意して探さないと認識できない地形であるため，小学校時代から知識としては知っていたものの現実離れした概念と感じていた．しかし眼前に広がる明瞭な段丘地形を初めて目の当たりにして，なるほど…（なんて単純で，それでいて現実に忠実な概念なんだ！），とつい嘆息してしまった．

このように研究室にこもっていては，また日本にいるだけでは経験できない地質を見たことで，何のために自然を科学という形で写し取るのかということを考える上での新たな視点を得たように思う．また，言葉を読み聞き使うに際し，概念の背景にある経験や感性に注意せねばならないと改めて感じた．

専門部会だより

構造地質部会2006年度例会プログラムのお知らせ

構造地質部会2006年度例会（2007年３月16日～３月18日　於　南紀白浜温泉　ホテル BAY LILY）は50名を越える参加申し込みをいただきました．また，２日目には半日巡検も新たに設定致しました．下記に口頭発表の暫定的なプログラムを掲載します．講演要旨締切は２月10日となっています．すでに参加および発表申し込みは締め切られていますが，参加のみ，もしくはポスター発表であれば，多少余裕がありますので，庶務担当の重松紀生（n.shigematsu@aist.go.jp）までお申し込み下さい．詳細は，構造地質部会のホームページをご覧ください．

３月16日（金）

午後：紀伊半島を構成する地質体とプレート間地震＊＊＊＊＊＊＊
伊藤谷生（招待）
　深部反射法地震探査の諸成果と日本列島形成史の再構築
小原一成（招待）
　西南日本の沈み込み帯で発生する様々なスロー地震
廣野哲朗　ほか
　台湾チェルンプ断層掘削プロジェクトHole Bの成果概要
鷺谷　威　ほか（招待）
　東海・東南海地域におけるプレート境界の時空間挙動
小泉尚嗣（招待）
　地下水の観測から地震の発生を予測する
鈴木博之
　紀伊半島における四万十帯の地質と構造
氏家恒太郎・山口飛鳥
　摩擦発熱による流体包有物のストレッチング
安間　了　ほか
　潮岬海底谷の南海付加体構造：とくにOOSTについて
川村喜一郎　ほか
　比高1000mの天竜海底谷の崖に沿って観察される南海付加体の地質断面
宮田雄一郎（招待）
　田辺層群にみられる泥ダイアピルの内部構造
ポスター発表

３月17日（土）

午前：田辺層群マッドダイアピル巡検　（案内者：宮田雄一郎）
午後：付加体の形成＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
木村　学
　付加体研究の新戦略
橋本善孝　ほか
　陸上付加体メランジュ帯における異常間隙圧の推定：四国白亜系四万十帯横浪メランジュ
山田泰広　ほか
　海山沈み込みによる付加体構造の変形：地質モデルを用いた検討（仮題）
坂本隆彦ほか
　紀伊半島，熊野層群の角礫岩層の形成過程
紀伊半島の火成活動・高温異常
花室孝広
　紀伊半島南部の高温異常域における地殻・マントル構造と温泉ガスの希ガス同位体比
星　博幸
　中新世に紀伊半島で何が起こったか？（仮題）
中屋志津男　ほか
　紀伊半島の高温泉と火砕岩岩脈との関係

西南日本の地質体・中央構造線＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
竹下　徹　ほか
　大規模D2正断層活動による四国中央部三波川変成岩の上部地殻レベルへの最終的上昇
ウォリス，サイモン，福成徹三
　中央構造線の正断層運動
高木秀雄　ほか
　関東平野下の中央構造線
重松紀生　ほか
　紀伊半島東部中央構造線沿いのマイロナイトの石英微細構造と変形条件
石井和彦
　花崗岩質マイロナイトの歪軟化過程
奥平敬元・別府裕樹
　領家変成帯のメタチャートに記録された付加体形成期変形作用
構造地質学の基礎（とくに古応力）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
木村希生
　マイクロブーディン古応力計の概要と応用
半田さつき　ほか
　マイロナイト中の石英再結晶粒径解析のための粒界抽出法
増田俊明
　超微小硬度計と岩石の力学解析
三輪成徳　ほか
　土岐花崗岩中に見られるマイクロクラックの三次元方位分布と生成環境および古応力の復元
安原健雄　ほか
　領家花崗岩中のヒールドマイクロクラックの方位分布解析による古応力の復元と，中央構造線の折れ曲がり
佐藤隆恒・高木秀雄
　丹沢トーナル岩体に記録された古応力の変遷
ポスター

３月18日（日）

午前：断層の解析＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
松田達生
　断層と断層岩の発達様式
宮田隆夫
　断層帯の地中レーダ解析（仮題）
大谷具幸　ほか
　阿寺断層破砕帯における変質作用
木村克己
　首都圏の浅部地質と地震動
曽田祐介
　九州東部，佐志生断層沿いの蛇紋岩の変形条件
荒井優祐　ほか
　白亜紀花崗岩に伴われる暗色貫入岩－徐冷型シュードタキライト？－
大川直樹，小林健太
　丹沢山地南部，神縄断層系に分布する断層岩類の特徴
在田一則・大平　寛
　中央ネパール，カトマンドゥ・ナップの上昇：フィッション・トラック年代によるアプローチ

総合討論，例会解散（～12：15）
午後（14：00～16：00）普及講演会　木村 学，小泉尚嗣

☆中部支部

報告

2007年中部支部年会のお知らせ

2007年日本地質学会中部支部年会を下記のとおり開催します．今回は静岡県の支部会員が中心となって開催し，伊豆弧の衝突を起点に広く中部地方の地質現象に関するシンポジウムを行い，伊豆半島での地質巡検を行います．年会内容の詳細及び参加登録等については，追って本誌に掲載の予定です．皆様のご予定にぜひ入れておいてください．

1．日程
2007年6月9日（土）　総会・シンポジウム・懇親会
2007年6月10日（日）　地質巡検
2．シンポジウム
「伊豆弧の衝突と中部地方の地質」：伊豆弧衝突についての地表地質とプレート運動を関連づけた解析は，テクトニクスを解明するための重要な指針となってきた．また，来るべき東海地震や富士山噴火などとも直結しているほか，中部地方の帯状構造の大屈曲とも関連し中部地方の地質の全てに影響を与えている．本シンポジウムでは，伊豆弧の衝突を起点として取上げ，中部地方の地質についてこれまでの解析では不十分な点や，矛盾点，今後発展させなければならない点について討論を行う．
3．巡検
伊豆半島（仁科層群，白浜層群，湯ヶ島層群，熱海層群城層を中心に）
4．会場
静岡大学教育学部L棟教育実践総合センター

☆東北支部

案内

支部総会・例会のご案内

支部総会・例会を2007年3月17日（土）午後1時～18日（日）の日程で秋田大学にて開催いたします．詳細は次号に掲載いたしますが，講演については若手学生を主体に申し込みを受け付ける方針です．講演題目，演者（所属），口頭発表/ポスター発表の希望を2月15日（木）までにメールまたはFAXにてお知らせ下さい．特別セッション等の提案を歓迎いたします．できるだけ早く，上記担当者までご連絡下さい．

日程：**2007年3月17日（土）～18日（日）**
会場：秋田大学（秋田市手形学園町）
講演申込締切：**2月15日（木）**
申込先：秋田大学環境資源学研究センター
高島：takasima@ipc.akita-u.ac.jp,
村上：hidekim@cges.akita-u.ac.jp
FAX　018-834-0409

☆関東支部

案内

支部研究発表会のご案内

関東支部では，今年6月，関東地方の地質研究の発展および若手への研究発表の場の提供を目的とした支部研究発表会を開催いたします．

地質大構造の議論や地球史研究も，地道な地域地質研究に支えられて展開されてきました．また，地質災害や地盤環境問題を考えるときも，地域地質研究がベースにあってこそ有意義な議論が生まれます．地域地質の研究には，それぞれの地域での研究者間の交流が不可欠です．そして，地域地質の研究を推進・発展させていくことが支部活動の重要な役割と考えます．

また，この研究発表会では，特に学生・若手研究者・若手技術者への発表の場の提供を考えています．この場合，学会員の有無を問いません．卒論・修論の内容や土木地質の調査結果などを是非この機会に発表し，意見交換や交流の場としてはいかがでしょうか．

なお，研究発表会では関東地方の地域地質研究の発表を歓迎しますが，地質学に広く関係する内容ならばそれ以外のテーマも受け付けます．

当日は支部総会も同時開催されます．開催日時や講演申込要領の詳細は次号でお知らせいたします．

日時・場所：**平成19年6月中～下旬，都内で開催予定**
講演申込要領（詳細は次号でお知らせします）
講演内容：関東地方の地質研究を歓迎しますがが，地質学に関係する内容ならば全て可．
申込資格：学会員（連名の場合はどなたか一人が学会員ならば可），ただし学生および若手研究者・技術者（35歳未満）は学会員でなくとも可．
講演方法：口頭あるいはポスター
講演持ち時間：15分（質疑応答含む）
講演申込締め切り：平成19年3月末予定
講演要旨締め切り：平成19年5月中旬予定
問い合わせ先：中澤（支部幹事；産総研）
E-mail: t-nakazawa@aist.go.jp，電話029-861-3956

バイオミネラリゼーションワークショップ参加報告

東京大学理学系研究科地球惑星科学専攻
向井広樹

2006年12月13日（水）に東京大学農学部構内の弥生講堂でバイオミネラリゼーションワークショップが開催されました．今回のワークショップは，東京大学大学院農学生命科学研究科の長澤寛道教授をはじめとするメンバーで構成するバイオミネラリゼーション研究会が中心となって開催したものです．このグループは2000年にスタートした比較的新しい研究グループで，生物材料科学や化学生命工学，応用生命科学，地球惑星科学など様々な分野を専攻する人達で構成されています．基本的に月に１回ゼミを開き，新しい情報および関連分野の研究を理解するために討論および情報交換を行っています．

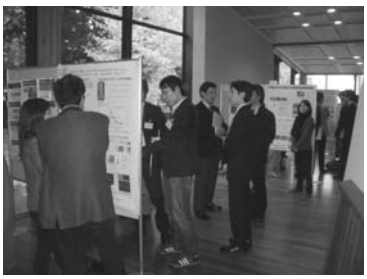
バイオミネラリゼーションという学問について少し紹介させていただくと，それは生物が作る鉱物「バイオミネラル」について理解しようというものであり，その解明には鉱物結晶学，溶液化学，生化学，分子生物学，生理学等幅広い視点で研究していくことが求められています．バイオミネラリゼーションは細菌から植物，動物にいたるまで日常的に幅広く起こるものであり，代表的なものとしてサンゴや貝殻などがあります．私たち人間の中にもリン酸カルシウムを主体とする骨や歯あるいは耳の中の耳石（炭酸カルシウムでできている）などがあります．

ワークショップ全体のプログラムは午前中に「バイオミネラリゼーションのメカニズム」という題目でセッション１が行われ，昼食休憩をはさんで午後にはポスターセッション，そして「最新分析技術と関連科学への応用」という題目でセッション２が行われました．参加者は全体で77名でした（セッション発表者10名，ポスター発表者37名）．

当日は大変寒い一日でしたが，会場となった弥生講堂は建物の多くが木で作られており，温かみを感じながらセッションは進められていきました．午前中のセッション１では５人発表者の方がバイオミネラリゼーションのメカニズムについての最新の成果を発表されました．ここではバイオミネラリゼーションの世界で長年取り上げられてきた磁性細菌やココリス，魚類の歯や耳石さらにカルサイト－アラゴナイトの問題が発表され，それらに関する最新の研究の成果を聞くことができました．特に私にとっては常温常圧下では不安定なはずのアラゴナイトを生物が作る原因を研究したカルサイト－アラゴナイト問題に関する発表は大変興味深かったです．また１つのテーマについてでも専門分野によって様々なアプローチの仕方があることを感じ非常に勉強になりました．

昼食休憩をはさんでのポスターセッションでは様々な分野の人が入り混じって発表が行われました．真珠の養殖でよく知られているアコヤガイや円石藻のココリス，ザリガニ，フジツボ，カキ，金魚のウロコ，耳石，コノドント化石などを調べた研究や，そのようなバイオミネラルの形成に関与するタンパク質についての研究が発表されました．セッションは非常に白熱したものとなり前後半あわせて１時間50分の時間がとられていたのですが時間の不足を感じるほどでした．個人的に印象に残ったのは生物系の方の，特に遺伝子学を取り扱った発表の多さでした．基本的に私は結晶学をバックグラウンドとしているためそういった発表はなじみがなく研究内容を理解することが難しかったのですが，発表者の方々が丁寧に説明してくださり私にも少しですがその実験手法や研究の意義について理解することができました．それと同時にバイオミネラリゼーションというものを学ぶにあたってより幅広い知識が求められていることを改めて強く感じました．今後似たような発表があった時，少しでもよく理解できるようせめて最低限の知識は身につけておきたいと感じました．

私もポスターセッションにおいて「巻貝の真珠層を構成するアラゴナイトの結晶方位と結晶外形」というタイトルで発表させていただいたのですが，多くの人にコメントをいただき，発表内容に対しての反論やアドバイス，励ましの言葉をいただくことができました．また専門分野が異なる方も自分の稚拙な発表を熱心に聞いてくださり，理解しようと努めてくださいました．ポスターの作り方や発表の仕方などに課題は残ったのですが自分にとって今回のポスター発表は今後に向けて大変有意義なものになったと思います．



（上）東京大学農学部構内の弥生講堂．（中）セッション１の様子．（下）ポスターセッションの様子

最後のセッション２では前半にFIB（集束イオンビーム）やNano SIMS（二次イオン質量分析計）といった最新の実験機器をバイオミネラリゼーションの研究へ応用することについて発表がなされました．さらに後半では関連科学への応用ということで直接私達の生活にも関係してくるバイオミネラルの応用についての研究発表がなされました．脂肪酸によって炭酸カルシウムの多形を制御しようという発表や，バイオミネラルを利用して新しい材料を構築しようという発表，さらに炭酸カルシウムを紙へ応用することについての発表が行われました．特にこの紙へ応用するという発表を聞いて，意外なところでバイオミネラルとは利用されるものだと感心しました．このセッション２でもセッション１に引き続き，大変すばらしい発表がおこなわれました．朝の10時から夕方の６時まで行われた今回のワークショップでしたが，全体を通して非常に充実したものになったと思います．

全てのプログラムが終わった後，東京大学農学部の食堂で懇親会が行われ終始和やかな雰囲気で進んでいきました．皆さん随分お酒も進んだ様で会の終わりの方では大層な盛り上がりを見せていました．またこの懇親会は異分野の人達が交流するという意味では大変貴重な場になったのではないかと思います．今回のバイオミネラリゼーションワークショップは参加者の方々からも大変好評であったそうで来年も開かれる予定となっています．もし興味をもたれた方がおられましたら一度ホームページを訪れてみてはいかがでしょうか．

（http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/biomineral/index.html）

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の４名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

f04j003d@mail.cc.niigata-u.ac.jp　梅津慶太（新潟大）
tksmcdr@hiroshima-u.ac.jp　高島千鶴（広島大）
iba@eps.s.u-tokyo.ac.jp　伊庭靖弘（東京大）
s059702@matsu.shimane-u.ac.jp　河野重範（島根大）

院生（研究生）の方へ「院生割引申請」について

2007年度（2007.4～2008.3）院生割引会費申請受付中

2001年より会費の院生割引制度が設けられています．定収のない院生（研究生）については，本人の申請により院生割引会費が適用されます．11月22日に一旦受付を〆切ましたが，まだ申請書を提出していない方で，該当される会員は下記の書式にて申請書を提出して下さい（郵送）．**最終〆切は２月28日（水）です．この期日までに申請書を必ずご提出下さい．なお，これまで（～2006年度）の会費についての申請受付は終了していますので，2007年度分の申請のみ適用となります．**

注意！！
毎年更新となりますので，今年度の割引を受けている方で，次年度も該当する方は改めて申請して下さい（2007年３月まで院生（研究生）の方も申請すれば適用）．

送付先：〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6階
日本地質学会

2007年度日本地質学会会費院生割引申請書

（新規・継続）

日本地質学会　御中

私は，運営細則第12条第1項（1）に基づき，会費の院生割引を申請いたします．

年　　月　　日現在

会員番号：

会員氏名：

所属：　　大学　　研究科

専攻　　前期・後期　　年在学中

上記，本学の学生につき，定収のない院生（研究生）であることを証明いたします．

指導教官（等）

所属：

氏名：　　印

※請求書（振替用紙）は再発行いたしません．これから申請書を提出される方は振替用紙の金額を書き替えてご送金ください．

最終〆切（厳守）
2007年２月28日（水）

追　悼

大矢　暁　会員のご逝去を悼む

応用地質株式会社相談役の大矢暁氏は，突然の交通事故のあと，回復への期待もむなしく2006年11月13日にお亡くなりになりました．享年74歳でした．我が国の地球科学界，地質科学界における一人の巨星を失ってしまった感があります．我が国だけでなく国際地球科学連合など海外の多くの機関からも，あまりの急逝の報せに驚きと悲しみの声がよせられています．

大矢氏は1953年に東京大学理学部地質学科を卒業，同大学院修士課程を終了後(財)深田地質研究所に就職され，その後応用地質株式会社へ移られて長らく海外勤務などをされたあと1993年からは同社社長，会長をご歴任，2003年から同社相談役に就任されていました．この間，特に学協会や大学などの公的活動にも精力的に取り組まれました．(社)物理探査学会会長（2000-2002）をはじめ，スタンフォード大学地球科学部諮問ボードメンバー（1997-2003），全国地質調査業協会連合会技術委員長（1996-2004，その後顧問），(財)震災予防協会評議員（2003-2006），(社)日本工学アカデミー環境エネルギー委員会委員（2003-2005），同政策委員会委員（2005-2006），(社)地盤工学会各種委員会委員や名誉会員等の要職を歴任．日本地質学会ジオパーク委員会委員（2005-2006）や国際惑星地球年（IYPE）国内準備委員会委員長（2004-2006）ではその先頭に立って活躍されている最中でした．

私は，旧地質調査所時代，大矢氏には外部評価委員に，また(独)産業技術総合研究所では運営諮問会議委員にご就任いただいた関係で直接ご指導いただきました．その過程で大矢氏はいつも，21世紀に向かう新しい地質学の役割について語られ，私も大いに賛同し影響を受けてきました．私は，大矢氏がご活躍の主舞台とされた地質調査業等の産業界でのご業績についてはくわしく存じ上げないのですが，実社会の長年の実践活動を通して得られたご経験にもとづいた未来への課題や教育に対する適切なご提言に，いつも深く共感を抱いてきたものです．

2000年秋に開かれた日本地質学会主催のシンポジウムで，大矢氏は「21世紀における応用地質学」というタイトルで講演され，後にそれは単行本「明日を拓く地質学」に収録されました．わが国の応用地質学の歴史を日本の近代化の歴史に対応させ，「地質学の導入と鉱山地質学発展の時代」，「土木・建設分野における応用地質学発展の時代」，そして「防災や地質環境のための応用地質学発展の時代」に区分しています．さらに，冷戦終結後，経済や環境問題が，また情報化社会の出現によりあらゆる問題がグローバル化する中，これからを新しい時代に対応する新しい応用地質学発展の時代と位置づけて地質学の課題と方向を論じておられます．大矢氏は常にこのような明確な問題意識を持っておられたからこそ，上記のような各種学協会等の要職において，活動や経営の刷新を力強く指導してこられたのだと思います．

大矢氏の活動はあまりにも多岐にわたるためここでそれを取り上げることは出来ませんが，とくに驚くべきことは，国際的な連携を含めた新しい体制や運動を創設し，自ら先頭に立って困難な事業を実践されてきたことです．すなわち，亡くなる当日まで全身で取り組んでおられたさまざまな国際活動やNPOの仕事がそれです．

大矢氏は国際惑星地球年（IYPE）対応国内実行委員会の第１回会合で同委員会委員長に推され，IYPEのサブタイトルである「社会のための地球科学」を真摯に受け止め，精力的かつ創造に富む指導力を発揮されてきました．2006年９月，新学術会議のIYPE小委員会では委員長に就任し，本年より開始されるIYPEに向けて本格的活動を開始したばかりでした．大矢氏はまた，IYPE本体のシニア・アドバイザーにも指名され活躍していたところでした．このIYPEを通じてこそ，「10年後の日本の地球科学が21世紀社会と真っ向に取り組む基礎を築ける」と常に語っておられたと聞いています．ともすれば細分化される地球科学が，新しい社会の期待する方向に沿って如何にインテグレートするか，これまでの枠組みを再構築して地質学・応用地質学を学際的な大きな科学として変革していこうという氏のご提言こそ，地球科学の「イノベーション」だと思います．

（NPO）地質情報整備・活用機構（GUPI）は地学の普及啓発・地質情報の収集整備活用・地質技術者の人材活用などを目的として，全地連技術委員長だった大矢氏が中心となり，2004年に設立されました．地質学を再興し地質屋の社会的ステータスの向上に尽くしたいとの氏の熱い思いに賛同する方々とともに，困難ですが着実な活動が展開されています．この活動の一環として，日本にユネスコのジオパークを作る運動や，「地質百選」など地学の普及にもつとめておられました．2005年に中国で開催された第１回世界ジオパーク会議以来，ほとんどすべての国際会議に参加され，その熱意により日本地質学会にジオパーク設立推進委員会ができました．昨年，北アイルランドのベルファストでの会議に初めて日本代表団メンバーとして参加され，日本がジオパークの設立に動き出したことを内外に示すことができました．

（NPO）リアルタイム地震情報利用協議会の副会長としては，当初から一貫して中心的な推進役として活動されました．地震に限らず，防災情報の共有化のあり方について産学官がどのように連携するか，特に民間の力をどのように引き出すかと言う点を含め，実効的な活動で貴重な一石を投じられました．そのほか，（NPO）World Seismic Safety Initiativeや（NPO）Geohazard Internationalなどの国際的な活躍に加え，ミャンマーやモンゴル，マレーシアなどアジアの国々で，現地の人々を少しでも地震災害から助けようと耐震補強や地震の教育に奮闘なさっておられたことを，実は私は今回初めて知りました．

このような行動力はどこから生れてくるのでしょうか．長年の実業で社会の人々に直接触れ合ってきたご経験から，また国際経験豊かなご経歴から，世界の人々を少しでも自然災害から救いたいという深い動機があったに違いないと感じます．そのためにも新しい技術のあり方，学問のあり方，教育のあり方に再構築が必要であると一貫して主張されてきたお考えが，一連で真に奥深いものであったことを改めて教えられた気がします．あまりにも多くのことでご指導をいただいていたことに頭が下がります．時代を先取りし困難な課題に情熱を持って挑戦し続けられたお姿は，これからも私達の目標となるに違いありません．

かけがえの無い指導者を失った今，残されたものとしては少しでもそのご遺志を引き継がねばと思いつつ，感謝の気持ちを込めて，心からご冥福をお祈り申し上げます．

なお，奥様の澄子様は下記にお住まいです．

〒114-0023　東京都北区滝野2-42-10

追記：本年１月10日よりロンドンで開催されたIYPE本会議において，大矢氏のこれまでの功績を顕彰して「Satoru Oya Prize」を制定することが決まり，IYPE期間終了時に，その活動に貢献のあった者を世界中から選び表彰することになりました．

（小玉喜三郎）

学　会　記　事

2006年度　第６回理事会議事録

2006年11月22日
日本地質学会　会長　木村　学

期　日：2006年11月11日（土）
12：00～15：30
場　所：地質学会事務所
出席者：木村会長，伊藤副会長，佃副会長，渡部常務理事・大友・狩野・公文・倉本・高橋・中山・久田（15時）・宮下・向山各理事，橋辺（事務局）
欠席理事：（委任有）天野副常務理事・Wallis・上砂，（委任状なし）増田

＊成立員数（12/17）に対し，出席者13名，委任状３名，欠席者１名で，理事会は成立．

報　告

１．運営財政部会（部会長-上砂，中山，向山，大友）
総務委員会（委員長-上砂）
庶務関係（担当理事-上砂）
・日本アイソトープ協会より，「第44回アイソトープ・放射線研究発表会」（07年７月後開催）の共催および運営委員の推薦依頼があった．メール審議の結果共催を承諾し，運営委員として，本人の承諾を受けて小笠原正継会員（産総研）を推薦した．
・「わが国における海洋研究船のあり方に関する提言（案）→文部科学省宛」（同シンポジウム，ワークショップ世話人）に対するアンケート　→木村会長が検討し，対応をすることとした．
・天文教育普及研究会では，「天文教育施設に対する指定管理者制度導入に関する声明」を出した．
・学術著作権協会より平成16年度複写使用料の分配（58,701円）決定通知があった．
分配金の中身：協会取り扱い分，日本複写権センターへの複写許諾委託分の分配金，米国CCCからの使用料等の合算
・出版著作権協議会より平成16年度複写使用料の分配（23,000円，12月末送金予定）通知があった．分配金の中身：日本複写権センターへの複写許諾委託分の分配金
・学術会議会長，副会長交代の挨拶：新会長　金澤一郎，新副会長：浅島　誠・鈴木興太郎，土居範久

会員関係（担当理事-中山）
１）入会の承認
正会員（3）：藤田　宏，鈴木孝弘，佐藤陽一
２）10月末現在会員数
賛助34，名誉75，正4484（内，290院割），学生42，合計名　4,635（昨年比　－137）
３）名簿発行のアンケートを選挙の通信に同封し全会員に配布，締め切り12月22日．

地球惑星科学連合（久田連絡委員）
・連合の運営会議は，学術会議地球惑星科学委員会に対し，連携，協力，支援のもとでの，５項目の検討事項を要望した．
・地学教育問題検討委員会から地学オリンピックについての情報
引き続き情勢把握に努める事とした．

学術会議関係報告（木村会長＝連携会員）
・第３部地球惑星科学委員会組織図，連携会員名簿，分科会名簿

広報委員会（担当理事-大友）
インターネット運営小委員会（委員長-坂口）
・新しいHPのたたき台作成，動作確認，改良作業中．
・サイト案（木村会長案）
・四役会議メモに基づいて議論
日本一，世界一の情報発信HPを目指す（イメージの例：GSAのページ）

２．学術研究部会（部会長-久田，公文，増田）
行事委員会（久田委員長）
・東北支部長および秋田大学地球資源学科長に対し，2008年度の年会引き受け依頼状を会長名で出した．鉱業博物館長，教育学部所属の会員にも協力要請をした．
・札幌大会について（→審議事項へ）
・2008年，岩鉱学会との共催については，板谷会長から検討に入ると連絡を受けた．
・高知大会の発表において先取権に関する事例が発生したが，当事者から円満に解決したとの報告を受けた．

国際交流委員会（公文　国際特任理事）
・国際戦略について
日韓交流分科会：
・韓国地質学会への会長訪問を受けて，来年の大韓60周年への参加も要請された．これにも向けて，協力体制を学会内に作るべき．
日米（GSA）交流：
佃副会長より，GSAのアジア拠点構築への要請通知，GSA会長より学会へレターの発送予定．学生の交流派遣などが想定．学会としては，HP作成や学会諸活動運営に向けた意見交換などを含め，積極的に対応する方向で，かつ慎重に検討を継続する．
タイ地質学：
会長より，雑誌交換の開始と，来年度の地質学会長招待についての打診があり，今後の両国間交流についても検討を始めることとした．
今後の展開：
・各国とのパイプを持つ会員からの情報を集約しておき，引き続く二国間交流の構想を提案していく

３．編集出版部会（部会長-狩野，久田，宮下，Wallis）
地質学雑誌編集委員会（委員長-狩野　副委員長-久田，宮下＝企画担当）
・今月の編集状況は以下の通りです（11月９現在）．
112-10：論２・短報３・口絵１．（42p）発行済み
112-11：日高帯特集号（1）　論説６口絵１（85p）校正中
本年度投稿論文数91編
［論説60（和文54・欧文６），総説４（和文４），ノート３（和文２・欧文１），短報21（和文21），討論３（和文３），］口絵８（和文５・欧文３）
投稿数昨年比　＋12　　査読中56編
・日高特集号は11月号で出版予定
・電子投稿システムの画面の説明を会員向けにNews誌11月号に掲載予定．
投稿システムの来年１月号からの運用に向けて，投稿規定を一部改定
基本的には電子投稿に対応させるための変更と，掲載ページ数上限を編集委員会が許容変更できるようにするための修正で，理事会はこれを承認し，直ちに新規定の施行に進むこととした．

Island arc編集委員会（担当理事-Wallis，事務局長-竹内圭史・角替敏昭）
【編集状況】
受理済み：17編（Miyazaki特集を含む）
作業中（電子投稿システム導入前の投稿）：９編
作業中（電子投稿システム導入以後）：16編
・特集の提案：板谷徹丸（岡山理科大）12～13編の投稿を予想．
・電子投稿システム運用開始後半年で，同システムによる初受理論文が出た．
【Ophiolite Virtual Monograph】
前回報告した，Ophioliteに関する論文のIsland Arc virtual Monographが完成した．Citationの多い論文２編及びprefaceはfree accessでき，ダウンロードも可能．
右記のURL参照．
http://wip.blackwellpublishing.com/iar_vi.asp
【アイランドアーク論文研究成果プレス発表のお願い】
氷期に形成されたサンゴ礁を沖縄で確認したという内容の論文について，プレス発表の要請を理事会に提出した．すでに

著者らの了解は得ている．Island Arc vol.15, no.4掲載　Sasaki,Kほか論文について．

Island arc連絡調整委員会（委員長-会田，担当理事-Wallis）
・Island Arcの2007年契約更新に伴い，契約書案の再検討事項についてBP社と協議し，契約年限を２年にすること，年度をまたぐページの貸し借りを可能とすること，が了承された．
・科研費の適正な執行状況に関し学振は財務省の指摘を受けた．それに関連し補助金受給団体に対し，過去10年間に科研費が交付された出版物についての発行部数，印刷経費，在庫数，廃棄数などのアンケートがあった．また，科研費の適正な執行等の説明会も開催され，今年度の実績報告ならびに来年度の計画調書の提出に際しては，これまでより詳細な報告や会計書類等の提出が求められることになる．
・理事会としては，来年度申請に関して，来年度要求から根拠有予算のみで積み上げ直す基本方針，その場合，補助金額は減額になる見込み，を了承し，次回理事会に，来年度申請の骨子を事後報告いただくこととした．

５．その他
ジオパーク推進委員会（担当理事-佃委員長）
・10月19日に委員会を開催．
・来年の札幌大会において，準備委員会と協力してジオパーク普及のシンポジウムを開催する予定．市民講演会「地質でまちおこし-ジオパークの試み-」として科研費，研究成果公開促進費Bを申請する．
→理事会として了承した．

【以下，評議員会の下の委員会】
法人化実行委員会（委員長-齊藤靖二）
斉藤委員長よりの報告を受け，審議事項で審議した．

オンライン化委員会（委員長-斉藤　眞）
・札幌大会の登録システムについて，今年の反省を踏まえて行事委員会と検討中．

選挙管理委員会（委員長-関　陽児）
・代議員選挙の立候補受付が締め切り後，11月１日に選挙管理委員会を開催した．
・全国区，地方区とも定数内人数の立候補者であり，全員が無投票当選となった．ただし，全国区については，細則に従って評議員選出のための投票を行う．
立候補者数　全国区　49名，地方区49名（関東地方区-1）
・評議員選出のための投票，11月15日から12月15日まで．
・理事選出のための立候補，投票による選出を１月末までに行う．
・これにより，理事をのぞいた代議員の上位から全国区評議員が抽出される．
→従って，最終的な代議員・役員選出者は，来年１月末に確定する．

６．４役会議審議内容
・10月14日審議メモ
・11月11日審議内容
１）札幌大会について，２）アイランドアーク科研費についての対応，３）法人化について，４）情報化について，５）国際戦略策定，など

○審議事項
１．法人化の件
これまでの文科省との折衝から退くことはせず，引続き現行法体制の下での法人化を目指すことを基本方針とすることを再確認した．

２．アイランドアーク掲載論文のプレス発表の件
広報委員会にて通常の手続きで扱うこととした．プレスに必要な体裁調整などは直接広報委員会が連絡を取って行う．

３．日韓交流および国際委員会について
報告事項の議論の後，具体的なプリンシプル，アクションプランの設定の後，来年四月のMOUを目指すこととした．そのために日韓交流委員会を国際交流委員会の下に設置．交流の盛んな会員から委員長を公文理事が推薦し，評議員会で設立承認を諮る予定．

４．札幌大会について
以下の四役提案について審議し，理事会として進めることとした．
１）就職支援Job-seekersのためのブース設置：札幌大会を機に開始できないか？　全地連，北海道の地質コンサルタント業界との連携．長期的には，地質，地球科学職域の拡大（地学教員の増大を含む）を目指す．これは，理事会活動．
２）大学単位の“自己宣伝”（大学ブース）と地質学会員の交流拡大：
地質学会Alumniのような企画が北海道大会からできないか？　北海道支部との協議
３）高知大会に続き大会ポスターの作成を提案し，これを定着化するとともに，札幌大会のイメージ・フレーズをつくる事を準備委員会に提案する
４）巡検案内書に続いて要旨集CD化を行い，大会運営の定常的方式を作りあげる．
・これらを含めた準備態勢を行事委員会，準備委員会，理事会等で仕分けを進めておく
・北海道大会の準備委員会関係者と学会理事会の事前打ち合わせを12月２～３日に予定する．参加者は北海道側７名（岡田委員長，竹下事務局長，宮坂支部長，西委員，前田委員，新井田委員，中川委員）に対し，理事会側５名（木村会長，伊藤・佃副会長，久田行事委員長，宮下理事）の予定

５．2008年の年会共同開催（岩鉱）について
・秋田大会自体の開催場所確定に努める
(1) 共催の確認
岩鉱・地質学会の協調（共催）へ
(2) 秋田大学の説得：11/22までに回答を待っているところ
評議員会前に久田行事委員長を秋田大に派遣（ご説明にあがる形），木村会長より，３学会協調のコメントを準備し，秋田大に発信
(3) 札幌大会準備活動とリンク
行事委員会担当業務について，確定した場合には秋田側に準備のための参加を提案する．

６．2010以降大会開催候補地の選定
・年会開催地，支部回り持ちが2009年に一巡する
・2010年からの開催地について，回り持ちの堅持を再確認したが，開催可能拠点数に鑑みて，以下の通り隣接支部の共催を前提とし，５ブロックとする方向で検討する．
中部支部⇒関東⇒近畿＋四国⇒東北＋北海道⇒西日本
ただし，共催学会の都合もあるため，方針の確定前に協議することとし，秋田開催が確定した場合の共催を協議する段階で，地質学会の方針を含めて検討する協議委員会を行事委員会に設置し進めることとした
・開催場所も大学だけではなくコンベンション施設の使用を考える
・各支部に遅くとも開催３年前の３月までに開催地の正式決定をお願いする．できれば５年先くらいまで決定していることが望ましい．

７．学術会議「イノベーション推進委員会」アンケート対応について
倉本理事に，ビジョン委員会報告を下に作成いただく．

８．2008年度事業方針案について
原案に若干の修正を加えて確認し，これをもとに事業計画，予算計画の策定を開始することとした．

９．その他
12月評議員会の議題
１）2008年度事業案，予算案について
２）日韓他の国際交流について
３）札幌大会について
４）情報化について
５）その他

2006年12月

日本地質学会会員2006年版名簿の作成について

運営財政部会　上砂正一
会員担当理事　中山俊雄

日本地質学会では，学会員相互の交流と理解を深める目的で２年ごとに会員名簿を作成しており，2006年はその発行年にあたっています．そのため個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第五十七号，以下「個人情報保護法」という。）による手続きとして，法務委員会の答申を受けて全会員の承諾を得ることにしました．本年6月以降，ホームページおよびNews誌に名簿掲載アンケートを記載し，会員各位に名簿記載項目の承認回答をお願いして参りました．また，9月の学術大会時にもポスターの掲示，回答用紙を配布しアンケート調査の周知徹底をはかりました．さらに役員選挙投票用紙配布を利用して回答はがきを封入し,住所不明等で連絡不能以外の全会員直接通知もいたしました．

しかしながら，現在までに本会に寄せられたアンケートの回答は約1,500人分でこの状態では名簿を発行してもほとんどの方は名前と所属だけが記載された名簿になってしまう状況です．

そこで本会といたしましては，前述いたしましたようにNews誌，ホームページ，ダイレクトメールによるアンケートを通じて，名簿発行の案内と目的を公表してきましたので，これにより従前の個人情報の利用が可能（第18条，第24条）と判断いたしました．

12月16日の評議員会においてはこれまでの経過をご説明し，回答のなかった方々についてどのように取り扱うかについてもご審議いただきました．その結果，名簿発行の趣旨と意義を確認し，下記の方針により従来規模の2006年版名簿を発行することになりました．名簿の発行様式は前回と同様で，全会員を収録します．基本掲載項目（氏名と所属先）以外の個々人の掲載内容については，回答があった方は回答通りの項目を掲載，回答を寄せられなかった方については，2004年版名簿にならい同じ項目を掲載いたします．つきましては，回答を寄せられなかった会員で掲載不可項目を希望する方は，2月15日までに日本地質学会運営財政部会に申し出てください．

また，これまでと同様に，会員名簿は名簿作成時の会員以外は配布の対象とはせず，会員も含めて作成時および以後も販売することは一切いたしません．

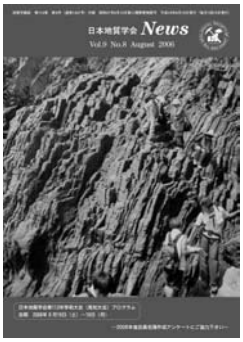
会員の皆様におかれましては，以上のことを十分にご理解いただき，名簿作成にご協力をたまわりますよう，また，名簿が配布されました際には発行の目的に沿ったご利用をしていただきますよう，なにとぞお願いをいたします．

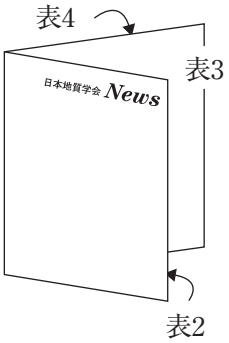
※　現在までに，名簿掲載のためのアンケートを提出していない方で，2004年版名簿の項目を変更される方は，2月15日までに日本地質学会運営財政部会に申し出てください．

広告募集

News誌に広告を掲載しませんか.

News誌の掲載広告を募集しています．学会の直接取り扱いになりますので，カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます．ぜひご利用ください．





＜広告掲載価格表＞

	価格（モノクロ）	版下作成	カラー
表 4	60,000	＋10,000	＋10,000
表 2	50,000	＋10,000	－
表 3	40,000	＋10,000	－
普通	35,000	＋5,000	－

（単位：円）

申込・問い合わせ：日本地質学会事務局
電話　03-5823-1150　FAX　03-5823-1156
e-mail ; main@geosociety.jp

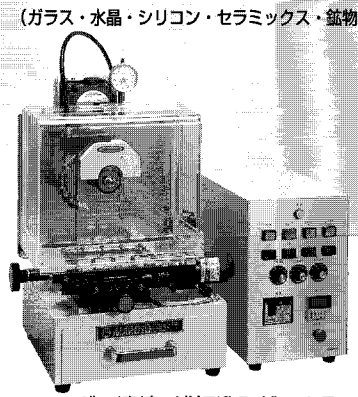
研究室のミニ工場

マルトーのラボ・ファクトリープラン3点セット

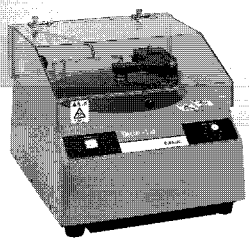
小型　精密　操作簡単　低価格

（ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工）

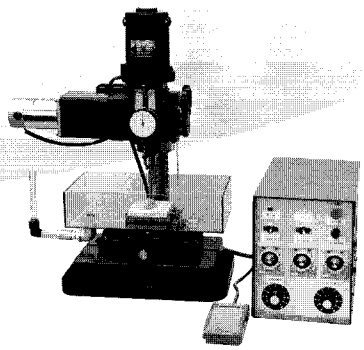
小さな機械だが役に立つ



カッティング　連続・浅切込みができる
ステップカッター〔MC-170〕
●試料へのダメージが少ない
●最小切込み量 10μm／pass
●最大加工能力 H25×L40mm
●設置面積 W550×L450mm
●本体価格 178万円～



ポリッシング　精密鏡面研磨機
ドクターラップ〔ML-180〕
●組織検査用試料のラッピング・ポリシング
●アクセサリー豊富
●研磨試料サイズ φ1～φ100mm
●設置面積 W400×L400mm
●本体価格 45万円～



コアリング　微小径コア抜き取り機
ミニピッカー〔MG-5N〕
●主軸回転数 4000～12000r／min
●加工能力 φ1～φ6mm×30mm
●設置面積 W600×L400mm
●本体価格 125万円～

材料を切る・削る・磨くそして測る技術で奉仕する

http://www.maruto.com

株式会社マルトー
本社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10 ☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル ☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288

表紙紹介

アルゼンチン・サンファン西方Precordillera東縁の中新統褶曲衝上断層帯

写真・文：アルゼンチン-チリ構造地質学フィールドコース日本人参加者一同

昨年，9月25日から10月5日に実施した，「魅力ある大学院教育」イニシアティブ，アルゼンチン-チリ構造地質学フィールドコース（本誌p. 7 参照）では，アンデス山地の中新世以降の著しい東西短縮によって形成された，褶曲衝上断層帯等を観察した．この著しい東西短縮は，ナスカプレートの低角沈み込み（チリ型沈み込み境界，上田・金森, 1978）に起因する現象と考えられている．表紙写真では，10月1日および2日に訪れた，サンファン（San Juan）西方アンデス山地Precordillera（本誌p. 7 第 1 図）東縁の中新統褶曲衝上断層帯露頭の一部を紹介する．

表表紙：折りたたまれた大規模向斜を形成する中新世fore deep堆積物．西側（写真の向かって右側）は背斜構造となっている．また，大規模向斜の下底は断層で断たれており，デコルマン構造となっている．

裏表紙左上：変形した中新統（赤色）が西から東へ第四系（河岸段丘れき層）に衝上する活断層露頭．

裏表紙右上：第四紀平坦面を断つ活断層上に位置する井戸．井戸の水面には地下水から沈殿した石灰華が浮いている．井戸の水面は，地表よりも10 m以上高い位置にある．この事実は，山間部の地下水系と第四紀平坦面下のそれが透水層を通じてつながっており，水圧の釣り合いを満たすために，井戸の水面が山間部の地下水面まで上昇していることを示唆する（自噴井）．本誌記事中の説明も参照．

裏表紙下：中新統褶曲衝上断層帯．変形量が大きいため個々の褶曲は隣接する褶曲と連続しておらず，団子状に分離してカオティックな構造をなす．

©日本地質学会 〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp